

第4回大和川流域委員会 議事録

開催日時：平成 17 年 1 月 28 日(金)9:30～12:30

場所：大阪厚生年金会館ウエルシティ大阪 7 階フロール AB

委員出席数：出席 11 名、欠席 6 名（沖村委員、加我委員、椎葉委員、千田委員、森下委員、山下委員）

1. 議事経緯

(1) 第3回大和川流域委員会審議報告

第3回大和川流域委員会審議報告がなされた。

(2) 委員からの情報提供「特徴・歴史」、「環境」

(a) 黒田委員：「付替 250 年碑文及びその他の歴史記述の間違いについて」「大和川付替工事と被差別部落の形成」

付替300年においても歴史的に誤りと思われる状況の改善がそれほど大きく取り上げられなかった。したがって、より正確な史実に基づいてはっきりさせるべきではないか。

大和川付替工事によって被差別部落がつけられた地域では、部落解放運動の町づくりの中で、川の空間利用が考えられている。

(b) 谷委員：「大和川の生き物と水質」

大和川の昆虫、魚類、植物、外来種の状況、生物と水質との関連などを紹介。大和川は生物がすむ環境としてはすばらしい多様性がある。水質をより適切に保てば、すばらしい大和川ができるのではないか。

(3) 大和川の現状説明「環境」

河川管理者から「環境」についての大和川の現状説明がなされた。

(4) 大和川の「特徴・歴史、空間利用、環境」について意見交換

主な意見及び補足説明は以下のとおり。

(a)特徴・歴史

堺市博物館で「大和川筋図巻」が公開され「大和川筋図巻をよむ」も発刊された。300周年記念事業堺市庁内連絡会による歴史パネル展や「大和川こども祭り」などがとりくまれ、大和川に関する市民からの情報も相次ぎ寄せられている。東大阪市では、大和川付替に関わる歴史の道が整備され、史跡の説明板が全部書き換えられた。300周年の1年間ですべて解決はしなかったがずいぶん前進した。300年目で終わったのではなく今後も取り組みを進めていく展望ができたのではないか。

歴史の問題はできるだけ最新の研究成果に基づいて、常に見直していく努力が必要である。

(b)空間利用

堤防の整備で芝生を張りつめているとツクシ取りやタンポポ摘みなどが出来ない。「川に親しむ」という子供に対する学習・教育という観点から、堤防に芝生を張りつめるよりも、なるべく野草的な植生をそのまま残すことが良いのではないかと思う。

管理上の考え方から芝生が張られている部分もあると思う。芝生にした方が治水上、例えば堤防に亀裂があるとか、いろいろなものを見つけやすいという点もあると思う。周辺の地元の方々と協力して自然を残した形で堤防を保護する制度もあり、住民から「草刈りをどんどんやってくれ」ではなく、「自分たちが世話をするよ」というところ

るではうまくいった事例もある。今は、転換期にあるということです。

通常の草の根と芝の根の張り方が異なり、芝が堤防の土を動かないように根を張っている。昨年の台風23号の出水による破堤では芝がある区間では越水をして、芝が抵抗力を持って破堤するのを弱めているという状況がうかがえた。

河川の中にある樹木は、治水的に考えると流水の障害物になるという考え方だと思いが、樹木があることによって、木陰があり、釣り人が来るという一つの川としての癒しの景観が形成されている。河川の中における樹木の保護についてどう考えるか。

全国的にも植生を大事にしていこうという方向になってきている。ただし背後地の状況、河道内の状況も踏まえながら、個々具体的に保護だけでなく植生の回復まで含めて河川整備の方法を考えていくということがこの委員会の一つの意見と考えている。水質浄化という意味でヨシ原の保護ということが非常に重要だと思う。水質浄化に係るヨシなどの保護を具体的なものとして施策的に考えていかれるかどうか。

整備計画のたたき台を示す中で、ヨシ原の保護についての河川管理者の考え方を示していきたい。また植生による浄化については検討中である。

(c)自然環境

万葉集などでは吉野川のアユが歌われているが、奈良盆地の諸河川ではアユが歌われていない。古代史において大和川にアユがいたかどうか。古代においてアユがいなかったとすると、何が原因だったのか。

大和川で生息調査を始めた30年から40年ぐらい前から、すでに琵琶湖のアユの放流が始まっていた。大和川に昔からアユがいたかいないかは、よくわからないが、文献などから調べる方法はあると思う。

由良川、吉野川、淀川などは、河川延長が長く、良い水源域を有しているために多くの種が生息している。大和川は、淀川等に匹敵する水源域である金剛山を有する点や、河川延長が短い中にも濃縮された形で多くの種がいる点で、他の川と対比しても負けにくいくらい良い川である。また大規模なダム等が無く、いろいろな環境が自然の状態を保たれている。

川の生物相は源流の姿を反映したものになるが、大和川本川は付替えられた時点で源流がもつ生物本来の姿から大きく変えられており、歴史と人が作りだした川ということが非常に興味深い。

生物の観点からは、本川よりも支川の方が源流の自然というものを、ずっと残した川になっている。川はきれい、汚いというだけでなく色々な要素を持っていると思う。きれいな水にしようというのであれば浄化センターなどの技術的な面で可能だと思うが、それだけではない川の姿というものを私たちは目指しているのだと思う。

長い歴史の中で、上流の石のところにするもの、砂のところにするもの、岸辺にするものなどがすみ分けられてきている。多自然工法などの場合でも、工事する地点に本来どういう生物がすんでいたかをまず調べて、それに即したものとすべきである。大和川では河川の中に河川浄化施設が多く造られているが、それらは生物の生息環境にとってどうなのか。

大和川の直轄区間にある河川構造物が、生態の連続性など、どういう生物にどのような影響を与えているかを検討した結果はあるか。

検討は十分ではないと思われる。人間を含めた生態系という観点から、それぞれの流

域にキャパシティーがあると思う。大和川はキャパシティーをかなり上回っている部分があるのではないかというところから議論をする必要がある。

(d)水質

生物を指標とした水質評価で、本川に比べ支川の上流のほうが汚れていると評価されているが、これは川として本来の姿なのかどうか。下流へいくほど汚れているのが自然に思える。

支川の上流部が汚れているのは、たとえば竜田川の場合は河川の形態は自然なのだが汚水の流入が非常に多いためだと思う。生物はそうした長期的な汚れの傾向をてきめん示してくれる。

中・下流域では、ある程度ハード的な面で水質をきれいにしてもらってもよいと思うが、大和川では、水が滞留して水質が悪くなっているのが、出来るだけそのような場所を少なくしてほしい。

堺市常磐町の捷水路によって水害対策はすすんでいるが、水がよどんで悪い影響が出ている。ファブリダムの設置場所見直しなど、改修時期には検討の余地があるのではないか。

狭山の下水処理場の下流でなぜ、水質が悪くなっているのか。

下水処理場の下流域の排水が流入する関係や、下水道の接続率の課題がある。

現在、大阪府のこの地域における下水道普及率が72%、接続率は80%である。掛け合わせると56%強程度にしかない。したがって、普及は行政で頑張るが、接続率を高めるためには住民の方のご協力がぜひとも必要であると考えている。

(e)利水

奈良では吉野川分水ができる30年ほど前まで水車を用いてかんがいを行っており、水車を持たないと稲が作れない状況だった。ため池の水がなくなると水車を利用して低い川の水を水田に入れる作業が日常茶飯事に行われた。

浅香谷では、大和川は9メートル掘り下げて付替えられたため、杉本新田の水田の用水を取水する際には、樋門では水が引けないので普通、三連の水車を使ってくみ上げていた。

2. その他

第5回大和川流域委員会は3月14日に王寺地域交流センターで開催予定であることが報告された。

以上